

失意の果てに知った人の恩

古河教会 菊地庸介さん

菊地さんは都内のIT企業でプログラマーとして働いていたが、不当な扱いと長時間労働によりうつ病を発症、茨城の実家に戻った。しかし、ひどい不眠に悩まされ、薬をビールで流し込むような自暴自棄な状態に陥った。結局、いたたまれずに実家を出たものの仕事も長続きせず「自分は厄介者」という思いを強めていった。そんな菊地さんを仏教を共に学ぶ仲間が茨城に戻るよう説得した。傷つけまいとする両親のやさしさ、過去を問わない心遣いに、「厄介者」と勝手に決めつけていた自分を恥じ、変わることを決意。知人の紹介で造園の仕事に就くと、公園の雑草刈りや街路樹の枝落としなど一日が変わると心地よい疲労感でぐっすり眠れるようになった。また、教会の映像作品の編集・配信などもこなす忙しい日々、人さまの役に立てていることを実感した。ご縁をいただいた方々のおかげで、自分でも人さまのお役に立てることの喜びを胸に、「これからは何ことにも精いっぱい取り組んでいきたい」と、菊地さんは語る。



人さまと、ともに幸せに——六波羅蜜

私たちには、必要以上に欲をつのらせて貪る心や、自分勝手な思いで他を怒ったり憎んだりする心、そして、永遠に変化しないものは何一つなく、みんな縁によって成り立っているという、ものごとすべてにあてはまる道理を忘れて、自己中心の欲や怒りに根ざした考えを正しいと思ひこむ心などの、いわゆる「煩惱」があります。これらは、いずれも自分自身の苦悩の種といえるものです。

一方、世俗の暮らしをするなかで、この煩惱を具えているままに、だれもが苦しみや悩みから解放されると教えるのが、法華経をはじめとする大乘仏教です。むしろ、煩惱があればこそ人格の向上をめざし、生きること死ぬことに迷えばこそ真理を求め、その結果、煩惱具足の私たちが、苦しまなればかりか、いつそ煩惱をよりよく生かす智慧に転じることができるという、ほんとうの意味でみんなが救われる教えに出会えたのです。今年一年、この文藝春秋誌面で紹介してきた六波羅蜜の教えもその一つです。ふり返ってみると、六つの徳目はどれも、欲や怒りや執着心などの煩惱と表裏一体の実践で、そこには自己中心の心を菩薩のはたらきへと転ずるキーワードがつけねに見え隠れしていたと思います。

